

# 地球市民の共生に向けた協同活動デザインの可能性

～地球共生ワークショップ実践からの考察～

白鳥 武

(摂南大学 理工学部 住環境デザイン学科 地球共生デザイン研究室)

共生・共生社会の定義や概念は研究が進み、様々に形容されて来たが、その実践となると未だ蓄積が少ない。更には対称の範囲を地球規模に設定すると、どこから始めて良いのかも解らない場合が多い。対称の範囲を狭めたいところだが、接点を持たなければ関わり合う対象すらできないと思いきや、一向に地球規模の共生にむけた実践の第一歩が進まない現状がある。そこで本研究が実践促進に重視するのが、もともと接点がなく言葉も文化も社会システムも違う、地球上のどこに生きているかも知らなかった地球市民同士が、包括的な地球共生を掲げてデザインされた協同機会の枠組み（地球共生ワークショップ）を通して、現地で困窮する問題に向き合うそこでのプロジェクト群のいずれかにおいて、共に心と力を合わせて遂行する、本研究では「協同」と称する活動の可能性である。これは説明が難しい地球共生という概念すらも、其々に協同の過程において、共生に必要な理解や、逆に理屈無しに懸命に遂行する中で生まれる信頼と相互支援関係等が、それらを未知な市民同士による「共生しか共通項や目的として挙げていないプロジェクト」において生まれる瞬間を目の当たりにした時に理解が生まれ、共生の視覚化や実体験化が自然に導かれ、包括的な共生への理解に向けた第一歩を個人に涵養できることを確認できた為である。研究方法として、地球規模の共生（以下、地球共生）を目指すという敢えて大風呂敷を広げて唱え、その無謀とも思える模索に有効な手法として、現地入りを前提とした地球共生ワークショップという「協同機会」を一つずつデザインして来た。この対人スケール感を持ちながら敢えて、事前検証から地球共生阻害問題が存在すると推定される現地やコミュニティを採択し、研究者を含めた現地に属さない異集団が現地コミュニティ・協同者ら個人と接触を持つ。そこで相互理解を図るとともに、現地が困窮する多様な人間活動上及び環境上の問題の「今」を浮き彫りにする為にも協同機会が役に立ってきた。異集団としての研究者らは、地球共生という理念に基づいてありとあらゆる決断や言動を採択し、徹底できたかがそのまま成否を分けてきた。特に他方が地球共生意識すら当初理解できない場合に、人間と人間の共生に必要な信頼に基づく安心をその協同機会を得るためには、やはり個人がそれぞれに他者と共生という土俵の中で向き合うという時間と実経験が重要であることを確認してきた。「我々とは異なる」知の体系や社会システムの中で生きる人々との協同を繰り返すことで、必ず何らかの障壁にぶつかり、その多くは相互の「違い」をリアルに浮彫りにしてきた。自利を暗に優先し権力を振りかざす者も中にはいたが、これら浮彫りになった事柄からこそ、時に議論も交え研究者らの分析力が問われながら、現地のリアルイシュー／ニーズの理解が導かれ、それを踏まえて地球共生を軸にしたどの様なアウトプットへ導けるかがプロジェクトデザインの要となる。その成否を左右する「地球共生デザイン力」の涵養には、世界中で実践を重ね、蓄積することがそのまま、他の地域のアウトプットへの参考になると考えて継続することが必要である。また経済的な側面では、不平等を生まないバランスが大切である。誰がこのプロジェクト群の費用を捻出するのか、常に国際金融市場上の格差をみて経済的にゆとりがあるとされる研究者側が受け持つのか、という問いが浮上する。当初はその傾向が否めないが、徐々に資金とは違う形で補完することでの対等性、平等性を維持するバランスを確立できる様になった。協同機会の働きかけ時点では、「資金が無い」ことが望ましい。無い中で持ち寄りながら解決策を協同で探ることこそが本来の協同と共生の在るべき姿と考える。この様に一つ一つの課題に常に「共生の在るべき姿」に戻ることで発見できた様々な実践時の出来事・成果例を紹介しながら協同活動デザインの可能性を提示する。